

心理学部における発達心理学教育（2002～2005年度） の歩み

—講義者の試みを受講生はどう受けとめたか—

中京大学心理学部 古澤 賴雄^{注1}

中京大学心理学部 小島 康生^{注2}

中京大学心理学部 塚田-城 みちる^{注3}

中京大学心理学研究科心理学専攻博士後期課程 酒井 由紀^{注4}

Steps in the progress of teaching "Developmental Psychology" for novice students from the Year 2002 to 2005.

KOSAWA, Yorio (School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

KOJIMA, Yasuo (School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

TSUKADA-JO, Michiru (School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

SAKAI, Yuki (Graduate School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-Honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666)

This paper describes the progressive implementation of teaching system on "Developmental Psychology" for undergraduate level course. Changes in the lecture items and notes from the year 2002 to 2005 are written. At present five courses "Developmental Psychology in Infancy", "Developmental Psychology in Childhood", "Developmental Psychology in Adolescence", "Developmental Psychology in Late Adulthood" and "Theories of Human Development" for sophomores, juniors or seniors are provided by regular staff and part-time staff in addition to "Introduction to Developmental Psychology" for the fresh students or sophomores. Several voluntary students who have attended on these courses actively talked on the contents and procedures of these lectures. Their various opinions show that although many students were satisfied with each course and were motivated to learn further about the developmental psychology, they require to innovate the following matters on the lectures: (1) teaching staff should consider more about the coherence and integration among the contents of lectures, (2) they should produce more time for class students to think and express their own opinions in each class, (3) they should clarify about the social role of developmental psychology so that the students can be motivated to find their future perspectives, and (4) they should investigate more about the systematic procedure how to use presentation and references in the use of English.

Key words: Developmental psychology, Teaching, Learning by novice students, Curricula

はじめに

筆者のひとり（YKs）が2000年4月に新設された心理学部に赴任し、発達心理学領域の一教員として学部授業科目「発達心理学概論1・2」「現代心理学の諸領域」「心理学講読演習1」などを担当して、強いショックを受けたのは、それまで勤務してきたいくつかの大学に比べて、本学の1年次学生の英語

力が相対的に貧弱であったことと学生によって学習意欲に大きなばらつきがあることなどであった。このような事情は一学年の人数がこれまで経験したこともない程、多いということから引き起こされていると考えれば、或いは予想できたことであったかもしれない⁽¹⁾。しかし、その様態は筆者の予想をはるかに越える“深刻さ”をもっているように感じられたのは事実である。

このような筆者の見方は翌年（2001年度）以後の「発達心理学概論1・2」の授業形態を大きく変える動機づけとなった。それが現在まで続いている教材の英文による提示及び同一教材の配布である。

注1 kosawa@lets.chukyo-u.ac.jp

注2 ykojima@lets.chukyo-u.ac.jp

注3 jtsukada@cnc.chukyo-u.ac.jp

注4 yukiss75@yahoo.co.jp

筆者はこのことに次のような意義を含めている。(1)発達心理学を学ぶ際に、すべての心理学領域がそうであるように、専門英語に慣れておく必要がある、(2)英語によって発達心理学を理解することによって、この学問に含まれている諸概念について多様な理解が可能になると考えられる、(3)これから社会を生きるために、英語を駆使できることが自分の生き方や考え方を国際的に広げる可能性をもてるなどである。もちろん、講義そのものは日本語で行い、提示された英文教材の用語や独特的表現を解説しながら、その授業での主題にそった内容を説明していくことは言うまでもない。

これまでこのような筆者の執念のもとに実施している「発達心理学概論1・2」についての授業方針及び内容を2002年度～2005年度⁽²⁾にわたって解説するとともに、専任教員の増加に伴って構築された新しいカリキュラム、さらには、非常勤講師による講義科目等について言及した後、受講した学生達が何を受け取ってきたかを座談会での発言を通して記述し、最後に今後の課題を考察する。

授業をする側が試みてきたこと

2002年度・2003年度「発達心理学概論1・2」講義方針

「発達心理学」というと人間が変化していく様相を生活年齢という“時期”と照らし合わせ、そこではどのような標準的な進歩が生ずるかを取り扱う心理学の一領域と考えられてきた。今でもともするとそのように見なされている。このような旧態以前の理解を受講生が抱くことなしに、最近の発達心理学を理解してもらうことができるか、そこに講義者の目標を置いた。

講義は次の3つの基本的理念をもとに構成した。その一つは、発達を生から死にいたる生涯にわたって取上げることによって、人間、他ならぬ自らの生を現在の時点に限って理解するのではなくて、より長い時間的経過から考える視点を受講生に育てるこ。二つ目は、人間は生物学的存在と同時に社会文化的存在であることから、一人一人をつなぐ社会的交互作用による共有事象こそが発達をもたらす土壤であるとする見方を受講生に育てること。そして、三つ目は、発達心理学そのものが、普段の社会生活に見られる何気ないひととの行為に目を向け、そこで人生をどう送っていくのかを明らかにしようと

する生活密着型の学問であることを受講生に理解してもらうことなどである。

授業形態は、スクリーンに教材を提示し、そこに書かれている英文を解説するとともに、問題となっていることは何かを説明した。専門的な用語については、表現の意味をそのような用語が生まれた背景とともに受講生に伝えるように配慮した。

2002年度前期

1) Prologue

ここでは、発達心理学の成立に影響した西欧社会における4つの流れとして、(1)イタールによるアベロンの野生児研究、(2)社会の工業化に伴う子どもの遭遇、(3)ダーウィンによる進化論、(4)ロック及びルソーによる人間観の提唱をあげて、それぞれが新たな人間理解に影響し、人間の発達を考える動機となったことを考察した。

2) The Central Questions of Developmental Psychology

発達をめぐる基本的問題として、「連続性」と「規定要因」を取上げた。前者については、人間とそれ以外の種ではそれぞれの心性にどのような類似性があるか、個人発達は、量的な変化か質的な変化か、発達には臨界期が存在するなどに触れ、後者については、氏と育ちの問題について、双生児研究が明らかにしてきたことに論究した。

3) Techniques of Data Collection and Research Designs

発達研究におけるデータ収集について、自己報告法（質問紙調査法）、事象観察法、実験法、生理的測定法を取上げた。事象観察法については、特に観察状況の文脈を取り入れながら観察をすすめる手法、それを用いた独創的な研究例を紹介した。実験法・生理的測定法については、乳児研究を進める上での寄与を研究例を挙げながら論究した。また、研究デザインとしては、横断的手法と縦断的手法に言及した。最後に、研究倫理について若干の考察を行った。

4) Evolutionary Background (担当:小島)

進化の歴史のなかでのヒトの位置づけを示し、生物学的な視点からのヒトの理解を促すためにこの講義を計画した。まず系統樹を提示しつつ進化史上ヒトに近縁であるとされるチンパンジーとの対比をおもに行い、直立二足歩行がサルからヒトへの進化において画期的な役割を果たしたことを見解説した。また就巣性、離巣性の特徴をそれぞれ示し、ヒトがこ

のどちらにも属さないこと、しかしこのことがヒトの発達を理解するうえで欠かせないものであることを説明した。

5) Sensory and response capacities and emotions in newborn and infants (担当：小島)

乳児期に特徴的ないくつかの反射を説明したのち、聴覚や視覚、嗅覚の特徴を実証的データに基づいて示した。なお、以上の感覚・知覚能力を調べるうえで必要とされる馴化法、選好注視法などの実験手続きについても詳しく説明を行った。次に、顔の弁別や音素の聞き分けを例に挙げ、実際にも、また脳神経科学的な知見に照らしても、周囲の環境が perceptual narrowing と呼ばれる知覚能力の限定化をもたらすこと、このことが発達上適応的なことであることを論じた。

続いて、情動の発達についての講義では、泣きに焦点を定めて、泣き方の多様性やそれに対応した情動状態について説明を加えたのち、乳児期にすでに様々な表情がみられることを、写真やビデオを示しながら解説した。さらに、以上のような乳児のもつ多様な情動が親子のかかわりを展開するうえで重要な役割を果たすことを、情動の伝染、相互同期性、情動調律を例に挙げて解説した。最後に、ベビーシェマと呼ばれる乳児の体型的な特徴について、それが生物学的な根拠をもつものであることを説明した。

2002年度後期

1) The End of Life—Death, Dying and Bereavement—

発達心理学領域あまり出てこない“死”的問題を正面から取り上げている Berk (2001) を参考にした。まず、人生のそれぞれの時期において、死をどのように理解し、どのような態度をもっているか、死の不安、ひとはどのように死んでいくのか、死を迎える心理、死ぬ場所（自宅、一般病院、ホスピス）、死ぬ権利、安楽死、残されたひとの心理（自殺、事故死を含む）などについて論じた。

2) Psychosocial Development through Lifespan—Erikson's Theory—

人生全体にわたるひとの心理的成长を論じたエリクソンの漸成発達理論を解説しながら、それぞれの時期がひとの一生にとってもつ意義を解説し、この考えがいままで人生を歩んでいる自分に対してもつ経験という視点から論じた。

3) Adolescence : The Transition to Adulthood
(担当：小島)

前回に取り上げたエリクソンの示した発達段階を示してから、人生全体からみた青年期の位置づけや課題を解説したのち、この時期に起こる自己概念や自尊感情の発達的特徴を、データを提示しながら説明した。さらに、アイデンティティが確立されるに至るまでのいくつかの段階や分類、その日米比較のデータを示し、アイデンティティ発達にかかる文化その他の影響を論じた。青年期に特有の性役割の発達についても解説した。

4) Adolescence and Early Adulthood (担当：小島)

青年期から成人期初期にかけての対人関係の特徴について解説した。青年期に特有の問題として、徒党と群集、周囲の仲間への同調、恋愛などをテーマに挙げ、これらを解説したのち、成人期初期については、とりわけ恋愛関係にまつわる問題について詳しく説明を行った。恋愛対象がどのように選ばれるか、愛情とはどのようなものか、またそれがどう変化するかなど具体的な問題を、実証データに基づいて解説した。

5) Diversity of Adult Lifestyles (担当：小島)

成人期のライフスタイルがじつに多様になりつつあることを解説した。具体的には、独身者、同棲生活を送るものがわが国のみならず多くの先進国で増加しつづけていること、しかしこうしたライフスタイルを選択した者の精神的健康状態は必ずしも良好でないことなどが、データとして示された。結婚しても子どもを持たない夫婦が増えていること、離婚・再婚にともなう問題、同性愛者の子育てなどについても論じた。

2003年度春学期

1) Prologue

前年度に同じ

2) The Central Questions of Developmental Psychology

前年度に同じ

3) Techniques of Data Collection and Research Designs

前年度に同じ

4) Prenatal Development

「人間がどこから始まるか」をフランス国家倫理諮問委員会の「胚 (embryo) は潜在的な人である」

という定義を紹介することによって論じ、発育に伴う胎児の変化と行動を静止画像と動画を提示しながら解説した後「胎児の能力」「胎内感覚の誕生後の影響」「母体のストレスと胎児の行動」などに分けて説明した。

5) From Newborn to Infancy

「社会参加への準備」として、新生児のもつ「原始反射」「無様式知覚」「相貌の知覚」「エントレイシメント」「生気情動」「微笑」「泣き」「選択的注視」などについて、それぞれを検討するために行われた研究例とその手法などに言及しながら、取り上げた。「新生児の心の世界」については、「新生児の心を知る方法」「新生児の感覚のはたらき」「新生児の記憶と学習」について述べた。

2003年度秋学期

1) Language Acquisition and its Development

言語発達について、音、語彙、文章、会話という4つのシステムに分けて解説した。音については、発声と音の弁別が変化していく過程を、語彙については、子どもが周囲のひととの文脈での獲得と抽象性理解の様相を、文章については、文法を身につけていく経過と文章理解の問題を、会話については、子どもが聞き手の立場をどのようにして理解していくかを解説した。

2) Theories of Language Development

言語発達の理論について、学習理論については条件づけと模倣、先天性理論については、チョムスキーの考え、相互性理論については、認知発達と言語獲得との相互作用を取り上げるとともに、文法の生成がコミュニケーションの社会的進化の中で培われてきたことを説明した。

3) Emotional Development and Social Functioning (担当: 小島)

情動にかかる問題全般を解説した。まず、情動とはどのようなものであるかを解説し、乳児期の情動発達について、基本的情動、自己意識的情動に分けてそれぞれの種類や特徴を説明した。これにつづき、他者の情動を理解する力がいつ頃から芽生え、それが発達研究のなかでどのように取り扱われているかを説明し、さらに情動制御の発達的特徴やそれに関連する文化の問題についても解説した。最後に、情動と関連して共感性の発達について論じた。

4) Gender Role Development (担当: 酒井)

「性差観と性別行動」を胎児の超音波映像、新生

児の性別によるおとなのイメージ、子どもの性別による親の関わり方、子どもの性別による親の期待などの研究例を挙げて説明し、さらに、「性別化の理論」について、社会的学習、認知発達、ジェンダー・スキーマなどの考えにそって言及してから、性差観が性差別につながる仕組みを取り上げた。

5) Thinking of Thinking

他者の考えを子どもがどのように理解していくか、そのことはいつ頃から可能であるか、自分が考えることと他者が考えることが違うということをどのようにして知るようになるかといふいわゆる“心の理論”について、研究例をあげながら解説した。また、このことに困難を生ずる発達障害の問題についても触れた。

6) College Experience and Social Development (担当: 小島)

大学時代に経験されることが人の発達にどのような影響をもたらすかを論じた。アイデンティティの発達とアイデンティティ確立に至る過程について説明したのち、大学時代を含めた青年期全般の対人関係の特徴について解説した。具体的には、友人関係や恋愛関係についてや、これと関連する文化の問題を論じた。増加の一途をたどっている10代での妊娠やこれに伴う問題についても解説した。

7) Psychosocial Development in Adulthood

ひとの一生における成人期のもつ意味を人生の四季に例えて論じた Levinson (1996) の考えにそって解説した後、成人のとてメンター (mentor) がもつ役割を生活の構築との関連において論じた⁽³⁾。

2004・2005年度「発達心理学概論1・2」講義方針

春セメスターの初回授業において、概括的なオリエンテーションを行った後、英国BBC放送作製による「Dying」を上映した。これは癌を患っている男性が死を迎えるまでの経過を本人の意向をもとに記録したものである。このような題材をまず提示することによって、人間はいつか死ぬ存在であることをあらためて受講生に伝えるとともに、“死”への途上にある“生”的意味をこれから様々な事象を通して考えてもらうプレリュードにしたかったからである。

さらに、これまでの経過を踏まえて改良したことは、人間発達の生物学的基礎についての解説をこれまでよりも大幅に導入したことである。しかし、このことはあまりにも生物学的題材に特化していると

の担当者の判断や受講生から意見を得たので、次年度においては、遺伝と環境との関係を論ずることに変更した。また、一コマで一トピックを取り上げることをより具体化しようとした。結果的には、秋セメスターにおいてはほぼ実現したものの春セメスターにおいては題材の関係から十分な実現には至らなかつた。

講義の進め方については、教材のスクリーン提示と同一教材を受講生にもその都度配布するという従来の方式を踏襲した。以下、両年度にわたる講義項目を列記する。

2004 年度春セメスター

- 1) Those determined at the moment conception
 - Genetic foundation
 - Patterns of genetic inheritance
 - Chromosomal abnormalities
- 2) Prenatal development
 - Prenatal development
 - Fetal learning
 - Maternal conditions and prenatal development
- 3) Brain development
 - Development of neurons
 - Development of the cerebral cortex
 - Changing states of arousal (being awake and asleep)
- 4) The twilight of developmental psychology
 - "Wild boy in Aveyron" and Jean-Marc Itard
 - Industrialization and urbanization
 - Charles Darwin and the evolutionary theory
 - Two philosophers who argued about human nature
- 5) The basic questions of developmental psychology
 - Continuity and discontinuity
 - Source of development
- 6) Methods of data collection
 - Behavior observation
 - Questionnaire method
 - Interview method
 - Experimental method
 - Physiological measurement

Research Designs

- Cross-sectional method
- Longitudinal method
- Cohort method

2004 年度秋セメスター

- 1) Development of the self : From infancy to childhood
 - Self-recognition
 - The self as actor
 - Construction of the self-concept
- 2) The acquisition of language
 - Hearing and sound
 - Words
 - The earliest vocabulary
 - Early word meanings
 - Sentences
 - Conversational acts
 - Conversational conventions
 - Taking account of the listener
- 3) Cognitive development through lifespan : From infancy to childhood
 - Schemas
 - Assimilation and accommodation
 - Stage theory of cognitive development
- 4) Facial expression and communication (担当 : 小島)
 - Emotions
 - Emotional regulation
 - Understanding others' emotions
- 5) Criticism against Piaget's theory of cognitive development
 - The importance of social interactions between children and caregivers
 - The indiscreteness on stages of cognitive development
 - The cognitive abilities of infants and preschoolers
 - The cultural context of cognitive development
- 6) Gender role formation (担当 : 酒井)
 - Children's sex and social expectations
 - Theories of gender development
 - Gender identity disorders

- 7) Peer and sibling relationships (担当: 小島)
Peer relations in adolescence
Romantic love
- 8) College experience and self development (担当: 小島)
The college experience
Identity
Paths to identity
Teenage pregnancy and parenthood
- 9) Diversity of adult lifestyles (担当: 小島)
Singlehood
Cohabitation
Childlessness
Variant styles of parenthood
- 10) Cognitive development through lifespan (2):
From adolescence to late adulthood
Hypothetico-deductive reasoning
Propositional thought
Postformal operational thought
Crystallized and fulid intelligence
Expertise
Wisdom
- 11) Late adulthood (担当: 酒井)
Reminiscence and life review
Stability and change in self-concept
Social theory of aging
- 12) The end of life: Death, dying and bereavement
Understanding of and attitudes toward death
How to die
Thinking and emotions of dying people
Bereavement: Coping with the death of a loved one
- Genetic-environment correlation
4) Brain development
前年度に同じ
5) Prenatal development
前年度に同じ
6) From newborn period to infancy
Response processes
Temperament
Sensory processes
- 2005年度秋セメスター**
- 1) Development of the self: From infancy to childhood
前年度に同じ
2) Theories of language development
The learning-theory explanation
The nativist explanation
3) Cognitive development through lifespan:
From infancy to childhood (担当: 塚田)
前年度に同じ
4) Cognitive development through lifespan (2):
From adolescence to late adulthood
Hypothetico-deductive reasoning
Propostional thought
Postformal operational thought
Crystallized and fulid intelligence
Expertise
Wisdom
- 5) Facial expression and communication (担当: 小島)
前年度に同じ
6) Thinking of thinking (担当: 塚田)
Theory of mind
Another illustration of children's theory of mind
Autism and the theory of mind
7) Gender role formation (担当: 酒井)
前年度に同じ
8) Peer and sibling relationships (担当: 小島)
前年度に同じ
9) College experience and self development (担当: 小島)
前年度に同じ
10) Diversity of adult lifestyles (担当: 小島)
前年度に同じ
- 2005年度春セメスター**
- 1) The twilight of developmental psychology
前年度に同じ
2) The basic questions of developmental psychology
前年度に同じ
3) How do we understand relationship between heredity and environment?
The question, "How much?"
The question, "How?"

11) Late adulthood (担当：酒井)

前年度に同じ

12) The end of life : Death, dying and bereavement

前年度に同じ

13) Method of data collection

なお、「発達心理学概論1・2」において、不定期に継続しているものとして「授業研究のためのビデオ撮影」がある。これはあくまでも担当者が自分の授業について検討するための材料を蓄積するためのものであり、担当者の同意があれば公開することも可能にしている。

2004・2005年度春セメスター「乳幼児発達心理学」2・3・4年次 担当：小島

講義方針：誕生の前後の時期から概ね就学前にかけての子どもの発達や、それを取り巻くさまざまなことからを包括的に学習することが、本講義のねらいであった。下記に示すようないくつかのテーマについて、それぞれ1回ないし2回にわたりて解説を行ったが、それぞれが単発的にならぬよう、前に学んだこととのつながりを意識しつつ各回のテーマに言及した。また、いずれのテーマにおいても、一般的な発達の特徴について示すだけでなく、それらの生物学的背景や歴史的背景、社会・文化的背景についてもできるかぎり触れるよう心がけた。

講義においては、パワーポイントで作成したスライドを前方のスクリーンに映写し、同時に、それらを印刷したものも学生に配布した。これは、細かな文字が読めない可能性を配慮したことと、それぞれのスライドについて補足的に解説したところをそこに記述できるようにという意図があつてのことである。

1) 乳幼児期の身体的発達

乳児期から幼児期にかけて起こる身体能力の発達について、からだ全体を使った粗大運動と、主として手先を使った精緻な動きにかかる微細運動を取り上げ解説した。粗大運動については、まず歩行にいたるまでの変化を詳細に取り上げ、それらの背景にある生物学的要因、歴史的要因、社会・文化的要因にも言及した。つづいて生後2年目以降にみられる、走る、ジャンプする、階段を上がる、物を投げる・受け取る、自転車に乗るなど、からだ全体を複雑に協調させたダイナミックな運動についても、説明を行った。微細運動については、物に向かって手

を伸ばしたり、つかんだりする行動や箸を使って食べる行動のほか、ハサミの使用やボタンの留め外し、書字などの発達について解説し、粗大運動、微細運動の発達と子どもの事故との関係についても、資料を提示し、説明した。

2) 乳児期の認知発達1

乳児期の知覚の発達について、視覚と聴覚を中心として説明した。視覚については、視力の変化や色・奥行きの知覚などに関して、具体的な実験を紹介しながら説明し、それらの神経生理学的素地についても言及した。聴覚については、母親をはじめ身近な他者の声の弁別や、その生物学的機能について説明した。次に、複数の感覚を協応させて外界を認知する能力がおそらくは生得的に備わったもので、このことが、初期の養育者との相互作用を方向づけていくことに触れた。言葉の話せない乳児の視覚や聴覚を調査するのに用いられる馴化・脱馴化法や選好注視法についても、具体例を提示しながら解説した。

3) 乳児期の認知発達2

ピアジェの認知発達理論の第一段階にあたる、感覚運動期の特徴について、詳細に解説を行った。-schema, 同化、調節など、ピアジェ理論の中核をなす概念について解説し、認知発達はもとより、他の能力の獲得や調整においても、これらの概念が適用できることを示した。つづいて、感覚運動期の下位段階にあたる6つの段階それぞれについて、具体的な実験例を多数示しながら説明し、対象概念の獲得が、ピアジェの考えていたよりもずっと早期に実現されることが、のちのさまざまな研究のなかで明らかにされつつあることについても触れた。

4) 自己の発達

乳幼児がいつ頃から、自己というものを意識するかについて、身体的自己、対人的自己、生態学的自己という3つの視点を取り上げ、それぞれの特徴を解説した。またそれにひきつづき、自己理解の発達を示す指標として目につくることが多い鏡映像認知について、どのような段階を経て、いつ頃、それが達成されるのかを概説した。その他、われわれ人間にもっとも近いとされるチンパンジーの自己認知実験の紹介や、持ち物の把握、性別意識、自己コントロールの発達など、自己理解の多様な側面についても説明した。最後に、自己理解にもたらす文化の影響に触れ、主として日本と欧米における自己の捉えかたの違いについて言及した。

5) 愛着の発達と母子相互作用

ボウルビイの提唱した愛着理論に基づき、愛着形成の過程とその基盤となる母子の相互作用の特徴について解説した。まず、ハーロウによるアカゲザルの母性剥奪実験や、ボウルビイによる乳児院の視察調査について説明し、愛着理論の誕生の背景を述べた。つづいて一般的な愛着行動の発達段階や愛着のタイプごとの特徴を示し、タイプ分けの際に用いられるストレンジ・シチュエーション法の手続きについて、ビデオ視聴も交えながら具体的に解説した。愛着のタイプに関する問題としては、母親の行動や子どもの気質のほか、文化的背景についても、データを示した。

愛着の基盤となる母子相互作用については、母子コミュニケーションに関連して、子どもに生得的に備わったさまざまな能力や特徴（微笑反応、相互同期性、共鳴動作など）、ならびに親の側に備わった特徴（情動調律、幼児図式への反応性など）について、解説した。

6) 親になることによる発達

発達心理学において親研究の歴史が非常に浅いことについて説明し、子どもの発達と親の発達とは切り離して考えることのできないことを強調した。まず、親への移行期において生じる心理的変化やその性差について、データも交えながら解説し、性役割、生物学的背景などをキーワードに、このテーマの概要を示した。つづいて、母親の育児感情に焦点を定め、とくに否定的感情と呼ばれる感情の背景に何があるかを、多様な先行研究とともに整理し、最後に親となることの土台としての養護性の問題を取り上げ、それがどのようにして発達していくか、少子化の著しい現代においてどのような取り組みが必要かを説明した。

7) 子どもの発達環境

子どもの発達現象が起こる環境を、大きく物理的環境と社会的環境に分け、とくに前者の物理的環境とその環境調整の役割を担う親の心理特性について解説した。具体的には、子どものいる生活で用いられる多くの物が、子どもの発達にどのように関係しているか、また親は物をどう利用し、反対に翻弄されているのかを、ベビーカーや哺乳びん、玩具、食具などを例に挙げ、説明した。結局のところ、物は、子どもの発達を支えると同時に、親の利便性ともおおいに関連することを示し、物が親子のかかわりのインターフェースをなすという視点を伝えた。

8) 遊びと仲間関係

乳幼児期の遊びや仲間関係について、その発達的变化や分類、機能について解説した。まず、いずれの時期にいかなるタイプの遊びがあらわれるか全般的な推移を示し、なかでも、ふり遊びの成立にかかる認知的要件、ふり遊びの経験が社会的認知発達にもたらす影響などについて詳しく説明した。つづいて、遊び仲間関係を中心とした子どもの仲間内地位について、ソシオメトリック法を用いた調査の手続きや分類の仕方・特徴について示し、仲間内地位に関するといわれるさまざまな要因（親の養育スタイル、子どもの気質、認知スキル、文化など）にも言及した。最後に、仲間との対立やけんかに注目し、けんかの機能や介入の効果などについて解説した。

9) 総括

以上、1)～8) のなかで解説した内容について、それぞれのことがらが個々に独立に成り立っているわけではなく、互いに連関していることを改めて示し、そのことについての理解が深められるよう、できるだけ身近な例を参照して説明を行った。また、そうした乳幼児期の諸発達を支える生物学的要件、歴史的要件、社会・文化的要件についても言及した。

2004・2005年度秋セメスター「発達心理学特講」

3・4年次 担当：小島

講義方針：研究を立案、実行するにあたって、その理論的背景を明確にしておくことや、そこから派生して独自の理論を整備していくことが重要なのはいうまでもない。卒業研究を行うにあたっても、理論を意識する心がけてほしいとの考え方から、2004年度に本講義を開講した。発達心理学誕生の歴史や、現代に至るまでの全体的な流れについて、まず解説し、その後は、各回ひとつの理論に絞って、詳しく内容を解説した。それぞれの理論について、正しい、正しくないという価値観を伝えるのではなく、発達現象を説明するための多様な“ものさし”として理論を位置づけた。

講義では、レジメを配布し、それをもとに板書も交えながら解説を行った。レジメには講義内容がすべて記されているわけではなく、空白になっている部分もあり、講義を聴きながらその空白部分を埋め、また板書した内容を補足的に記すよう指示した。各回の講義の最後に感想・質問レポートを書いてもら

い、翌週それらについて解説するというスタイルをとった。

1) 発達心理学誕生の背景

産業革命をはじめ、19世紀後半の時代背景のなかで発達心理学がいかにして誕生し、発展してきたかを解説した。まず、発達検査が開発されるまでの経緯や、当時、影響力の強かった進化論と発達心理学との関係のほか、ピアジェの理論が誕生するまでの下地がどのようなものであったかを説明した。

2) エソロジー

行動の生物学と呼ばれる動物行動学（エソロジー）について、ローレンツやティンバーゲンの初期の実験や観察も含めて説明した。本能行動の特徴を学習や経験との対比を通してエソロジーの考え方を解説し、ボウルビイによる愛着理論との関連についても触れた。またエソロジーの考え方を人間の行動にまで広げたヒューマンエソロジーや、社会的行動の生物学的基盤に焦点化した社会生物学についても、具体的な行動に言及しつつ解説を行った。エソロジーの特徴である、行動を丹念に記述し、分析する技法の有用性についても述べた。

3) 社会的学习理論

バンデュラが提唱した社会的学习理論においては、他者の行動をモデルに、ある行動が習得される過程をいくつかの段階に分けて説明している。この社会的学习理論は、攻撃行動、向社会的行動、性役割など、多くの発達現象を説明するのに有効であるとされている。講義では、バンデュラの実験を中心に、この社会的学习理論に基づく実証研究を紹介した。

4) ヴィゴツキーの社会文化的アプローチ

ヴィゴツキーによる発達への社会文化的アプローチについて解説した。心のなりたちにたいし社会や文化、歴史などの背景が及ぼす影響は計り知れない。ヴィゴツキーの理論においては、その仲立ちをするものとしての言葉の役割を重視するが、それがどういうことなのかを内言などの独自の概念とともに詳述した。つづいて、ピアジェ理論との同異についても触れ、最後に、ヴィゴツキー理論において重要な概念をなす最近接領域の考え方について、その実践場面での活用も含め解説した。

5) アフォーダンス理論

アフォーダンス理論は、近年、発達心理学の領域において確実に重要な立場を築きつつある。ギブソンによる知覚理論の誕生にはじまり、それが発達研究においてどのように生かされうるのかを、今後の

展望も含めて解説した。また、アフォーダンス理論と関連して、とくに運動機能の発達に関する研究領域において最近よく耳にする、ダイナミカル・システムズ・アプローチについても触れた。

6) システムとしての家族

家族システム理論は、臨床実践の現場だけでなく発達研究の領域においても取り上げられることが多くなってきた。家族内におけるメンバー同士の関係や各メンバーが示す行動・役割を、家族全体の枠組みのなかで理解しようとする、この家族システム理論について、実証研究での利用のされ方も含め解説した。家族機能の考えかた、オルソンの円環モデルについても具体例を交えて説明した。

7) 社会構成主義、ナラティブ研究

社会構成主義の考え方とは、これまでの心理学研究で当たりまえとされてきたものとは異なり、いわば現象の捉えかたのコペルニクス的転回とも呼べるものである。心理学はもとより、多くの関連分野において、この社会構成主義的なアプローチが近年脚光を浴びるようになってきており、発達研究のなかでは、この流れに沿ってナラティブ研究が多数行われるようになってきた。講義においては、6)で解説した“家族”を、この社会構成主義的なアプローチに基づいて説明しようとするとどうなるのかを例に挙げた。

8) 総括

発達研究のみならず他の心理学領域においても、理論を意識することがいかに重要であるかを改めて解説した。

非常勤講師による授業科目

「家族発達心理学」 2・3・4年次（隔年春セメスター・

集中講義） 担当：柏木恵子

講義概要：社会の変動の中で家族がどのように変化・発達するか、さらに家族成長の人格的・社会的発達が社会と家族の変動に伴って変化していく様相を考えた。系統発達的、比較文化的な研究の成果、さらには、歴史学・人口学・社会学などの研究も視野にいれて、家族と個人の発達を研究する方向をさぐった。

「児童期発達心理学」 2・3・4年次（秋セメスター・

毎週講義） 担当：速水俊彦

講義概要：発達的变化の激しい幼児期と青年期の間

の児童期に焦点を当て、知的・情緒的・社会的な発達の様相について解説した。主に知的な側面としては思考や記憶の発達について、情緒的な面としては動機づけや感情の発達について、社会的な面としては友人、先生、親との人間関係の発達について論じた。児童期は学校生活が中心になるので教育心理学と重複する部分も一部ある。

「青年期発達心理学」 2・3・4年次（春セメスター集中講義） 担当：白井利明

青年期は近代社会において成立した一つの発達段階である。青年期の課題は、自己形成の主体となることであり、市民社会の担い手としての成人になることである。しかし、現代社会のかかえる地域・職場・学校・家庭の問題は青年期に今日的な影響を与える。青年期を理解するのに必要な基本的な枠組みの提示と同時に、班討論などで資料を読みとり、今目的な話題をめぐって議論した。

「老年期発達心理学」 3・4年次（春セメスター隔年・集中講義） 担当：藤田綾子

講義概要：生涯発達のなかでの高齢期の特徴について、生理的・心理的・社会的な視点から論じながら、社会が高齢期をどう捉えているか、そこに含まれるエイジズム（高齢者に対する偏見）や高齢者介護の社会的問題などを幅広く論じた。

この他、関連科目として「教育心理学」「障害児心理学」などが開講されている。

受講生の発言：講義者への問題提起

これから記載するのは、教員・院生・学部生から構成する発達心理学勉強会（隔週木曜日 18時～20時開催）の際に催した座談会での発言である。それぞれが明確な指摘であり、講義をする側への有益な示唆を含んでいるので、発言の内容には一切修正を加えることなく掲載していく。なお、講義者が今後検討すべき見解については、とくに下線を引いた。

A：先生が発達心理学概論を英語でやられるっていうのをホームページか何かで見た時に、すごくびっくりして、すごい抵抗もあったのですけれど、留学したことで、やっぱり同じようなパワーポイントも全部もちろん英語ですし、そういうのはすごく自分

のためになったと思いました。英語科のひと達は、もちろんそういう授業を受けて、向こうに行きますけれど、私の場合は英語の授業は取りますけど、そういう授業を受けるのは、先生の授業以外にはなかったので、それはすごくためになりました。あとは、いつ頃歩くとか、そういうのをいろいろ聞いててもいまいちこうピンとこないのですけど、実際にビデオを見たりとか、例えば、小島先生もお子さんの話をされたりとかして授業の中で、そういうのだとすごくイメージが沸いておもしろかったのですけど。なかなか教科書だけだといまいちこうピンとこなくて、実際にそういうビデオを見たり、お話を聞いたり、あと友達の子どもを見たりしてると、自分のためになるというか、心理学の中でも身近なことだなということが印象にあります。

B：私はこの大学に来るときに、臨床心理学をやるつもりで、むしろそれしか知らない状態で、発達心理学という分野を先生の授業で始めて触れることで、今まで、自分が人生20年弱送ってきて、たとえば、ぶち当たった壁だったりとか、悩みだったりとか、そういう私はなんでこんなに辛いんだろうと思った中学校や高校でのことが、それが当然のことのように本に載っていて、こういう時期なのだというふうに書いてあったことに、すごい衝撃を受けました。それで、発達心理学が、Aさんがおっしゃったように、一番身近で、普段の生活に即している分野なのかなと思っています。そういう意味で、発達心理学の勉強をやっていきたいと思うのですが、やっぱり身近に即している部分が強くて、それがだからこれからどうなるのだろうという展望のようなものが、例えば、臨床心理学であったり、他の心理学分野に比べてまだまだ欠けているような気もしています。

C：私の場合は一年生で入ったばかりで、何がなんだかという感じなのですけど、ほとんど、発達心理学概論についてしかたぶん言えないのですけど、概論は一年生で取れる唯一の専門分野なのです。それで、最初、発達とは何ぞやから入って、私の場合発達って字だけみたら乳児期とか、そういう部分だけだと思って授業受けたのですけど、実際受けてみると、もう老年期までとか、なんか、死に至るまで一生涯ということを初めて知りました。私の場合、シラバス、英語だったじゃないですか、読まなかつたのですよ。まぁとりあえず受けてみようという感

じで。たぶん読んだら一生涯ってこともわかったと思うのです。実際には、英語で書かれているというそのことで、受けないでおこうっていう学生が多かったらしいのです。いざ授業を受けてみたら、先生はちゃんと日本語で説明してくれるし、聞いてればわかるのですよ。だからなんかそんかしこまらないで、もっとみんな気軽に受けければ、もっとすんなりと、一年生のうちから受けられる授業だと思います。授業聞いていて、発達って言うのは一生涯のことだから、誰しもが関わることで、身近なことだから、自分の経験とか、周りのことと関連付けて、わかることなので、なんかもっと気軽に、みんなが、英語で嫌だとかじゃなくて、受けてくれればいいのになあと思って、今周りに薦めているのですけれど、いまいち反応が、英語って言うことでひっかかっているようです。実際受けてみてすごく面白いし、私も最初は臨床っていう感じで入学してきたので、発達という言う分野に、こんな勉強会に入るなんて思わなかつたです。もっと最初に絶対、発達心理学はいろんな部分の心理学の基礎、臨床心理学にしても発達心理学をやっていれば、もっとうまく考えられるというか、物事の視野が広くなると思うので、そういう意味で最初に発達心理学を勉強できて、わたしはよかったです。一年生のうちに臨床だけと絞ってしまう人が多くて、それが私からみると残念なことで、頭から決めてしまうのでなくて、もっとみんな広い目でみて、心理学全体を学んでいったらいいのじゃないかと思います。

D：私も臨床にいこうと思ってこの大学に入ってきたのですけれども、発達心理学概論を受けて、発達ってなんて面白いだろうと思いました。臨床心理学だと、人を見る目が一つと言うか、限定されているけれども、発達心理学だと誕生から死までみれる。人間をそういう観点で見ていくことができるっていうので、言ってしまえば、範囲が広くって対象となる人がものすごく広いので、発達心理学にのめりこんだのです。それで、一年生のときは概論があって、発達心理学に触れることができたのですけれど、二年生になると発達心理学関係の授業がほとんどなかったのです。で、三年生になって古澤先生のゼミに入つて、ようやく授業も専門分野に入るので、発達の授業も増えてきたのですけど、一年生と二年生の間に発達心理学に触れる機会があまりなかったので、すごくそこは残念だったなと思っています。

最初の頃に、発達心理学ってすごく面白いって楽しんで受けていたけれども、そのときにどういう視点で物事を見るのかとか、どういうふうに、例えば、子どもだと、どういう発達の視点があるかとか、疑問に思う気持ちをもうちょっと一年生とか二年生とかの間に育ててもらいたら、三年生のゼミの時も、自分にはどういう興味があって、卒論にどういうのをやっていこうかという下準備ができたのかなと思いました。それから、小島先生の発達心理学特講で、発達にはこういう理論があるんだって教えてもらえたことはすごく面白くて、自分だったら、この事象はこの理論で説明したいっていう具体的な考えっていうのが頭の中で考えることができたりして、過去から歴代のすばらしい人達が考え出した理論を知ることができて、面白かったなあと思いました。授業を受けているところがわかっている、こういうことがわかっている、っていうふうに教えられるので、自分には何ができるんだろうという感じがしてしまうので、ある一つのことに対していろいろな様々な意見があるじゃないですか、心の理論でもなんかこう誰々がこういうふうに言っているとかいろんな意見があるのだけれど、そういう人たちの意見をどんどん教えてもらいたいなあとか（そういうことは自分たちで学んでいくことだとは思うのですけど）なんかそういうのもあるのだっていうのも教えてもらいたら、どんどん興味も膨らむんじゃないかなと思っています。あとは研究方法とか動物園実習とか行って、観察方法を具体的に自分で実感できたのもすごく楽しく発達に触れることができて面白かったのでああいうのは続けて欲しいと思います。

E（院生）：皆さんのが言われているように、発達心理学のいいところは自分自身あるいは自分自身が経験してきたこと、これから経験するということをイメージしながら話を聞けるというのが最大のポイント、メリットだと思うのですけれども、それであの授業っていうのは「生きるということ」、あるいは「生きているっていうこと」についての新たな価値観を皆さんに植え付ける絶好の機会だと私自身は思っています。というのは、青年期はすごく考え方自体が高度になってくる時期ですので、今、無気力な学生が多いとか、授業も寝ながら聞いているのか聞いていないのかわからないような学生がいますけれども、そういう彼らに、生きるっていうのはどういうことか、まさに人間は常に developing していくのだ

ということを伝えていけるような授業、あるいは話し方っていうのでやっていくと、興味を持つ人がたくさん増えてくるのじゃないのかなという気がしています。それから、皆さんも指摘されているように、臨床っていうのがすごくブームになっていて、なんだかよく分からぬうちに臨床の方に流れている人がいますけども、あくまで、臨床というのは発達の中にある臨床だって、臨床あって発達っていうわけじゃないっていうことを教えていく機会にもなるのかなと思います。研究科自体の名前も、ここは「臨床・発達心理学研究」って順番がちょっと逆なんじゃないかとある院生さんと話していたのですが……。それから、毎回の配布資料ですけども、先生が作って下さる資料は非常に細かく記述されていて、テストを受けるときには本当に役に立つのですね。それこそ、授業出てない人までもが、英語ができる人なら、それを読んでしまえばできてしまうっていう、いい意味ではそういう意味でよいのですけど、反対にいえば、一生懸命毎回授業出ていても、英語が読めない受講生は英語だけにとらわれてしまって、結局、最後に授業評価したときに、英語が難しい、英語の授業じゃないんだっていう意見が出てきてしまうと思うのです。そうすると先生がされる授業内容はこんなに面白いのに、英語の文章だけが、受ける学生にとって、大きく印象づけられてしまう気したので、私自身も授業を持たせてもらっての立場で言わせてもらうのですけれども、なるべく私は英語一文に対して、しゃべりを多めに、自分自身の身の回りのことを関連付けて話すという風にして、聞いてもらおうとしていたのですけれども、その、英語に対するイメージを変えるようなハンドアウトの仕方というか、資料の作り方の工夫もあるのかなという風に思いました。テストの準備には非常にわかりやすくていいのですけれども（一冊の本のようになっているので、未だに私も大切に持っているのですけど）、どうしても最後に授業評価をしてもらうと、「英語が……」っていう意見がたくさんでてしまっているので、言葉で、日本語でしゃべって、理解してもらう部分と、あとどうしても必要な部分については、英語で書き記しておくというような二重の方法を使って、発達心理学の面白さというのを伝えていくのも一つの方法なのかという風に思っています。

B：私も、一年生の時に発達心理学概論で使ったハ

ンドアウトを未だに全部持っていて、院入試の勉強の時も出してもう一回見直してみたのですけれども、とてもそれが使いやすくて、ああ取っておいてよかったですなってすごく実感しました。私は正直入学当初はとても英語ができなくて、発達心理学概論も二年がかりで取ったくらい、英語ができないのですけど、やっぱり最初は先生が話される内容と、英語が同じタイミングで、頭の中でつなぐことができなくて、「ああ、もう英語の訳、英語の訳」みたいな、とりあえず、分からぬ単語に線を引いて、チェックして、辞書引いて、もう頭の中も訳すことできぱいいっぱいで、先生がおっしゃっていることを一言一言かみしめる余裕が私自身はなくて、いっぱいいっぱいで、一回目のテストは英語にとらわれてできなかったんだと思っています（笑い）。やっぱり、ぱっと見て英語がいっぱいあるというのは、英語ができる人間にとっては結構ギョッとするというか、そういう部分はあったような気がして、訳せないとかそういうのではなく、うまく両方をやるということがまだ身についてない段階だと思うので、ちょっと時間を下されば、たとえば次回のものを前回に配布してくだされば、わからないところをチェックできたりするので、そうすると話を重点的に聞けるかなと、ちょっとEさんの話を聞いて思いました。ちょっと自分に余裕をもって、書き込みもできるかなと、「この単語チェック、この単語チェック」ではなくて、発達心理学概論の用語としてチェックができるかなと思いました。

C：私も、お二人（Eさん、Bさん）と同じような意見ですけれども、去年発達心理学概論を受けてみて、自分で事前に訳してはきているけれども、やっぱり専門用語とかだと、微妙な意味の違いがでてきてしまって、「自分のこの訳し方が違ったんだ」という自分の間違いが気になってしまって、「ああ、こういう意味だったんだ」という確認だけに気が取られてしまって、先生のプラスアルファの話を楽しむ余裕が余りなかったのです。あとでノートを見てみると、訂正の青ペンの文字とかがごちゃごちゃしていて、「あれっ、これってどういう文章なのだろう」とわけがわからなくなってしまって、後で読んでもまとまらないのですよね。もうちょっと、そのあたりをどう工夫してもらえればよいかはわからないのですけれど、ちょっと苦労していた部分があります。あと、違う話なのですけれど、私も本当は

臨床という分野について、すごい魅力を感じて心理学部に入ったのですけれど、でも後で発達心理学概論を聞いてみたら、自分が惹かれていた部分は本当は発達にあったのだってことに気づかされて、症状を見るよりも、それ以前にその症状になったにはその人の発達の過程があって、その結果、その人の人生がとても重要になってきて、発達というのはとても重要なものだと感じて、私は発達心理学がすごく好きになったのです。あと、発達心理学は自分自身について照らし合わせながら勉強できて、小島先生の授業とかで聞いてみると、「ああこういうことが自分にもあったのかな」とて両親に聞いてみると、「こんなのがあったんだ」みたいな同じような答えが返ってきたり、ちょっと違うような部分があつたりして、それはなんで私はこういう、ちょっと先生が言っていたのと違うようになつたんだろうと思ったら、それはなんか自分の環境の違いとか、いろんなことがすごく影響していて、人の人生を作り上げていることをすごく再確認できたのがとても面白かったと思っています。

F：私は中京の心理学部には行こうと思っていた、それで、皆さん、結構臨床という言葉がよく出てくるのですけれど、私は、心理学っていうと観察をするのとか、実験をするのとかっていうイメージがあったので、「どういうことをやるのですか」と塾に行っていた時に、そこでバイトしていた大学生の先輩に聞いたのですよ。そしたら、その先輩が「発達心理学を勉強しているよ」というふうに説明してくれて、その話を聞いて、これこそ心理学だなって感じて、それで、一年生の時の発達心理学概論で、それこそ染色体の話から始まって、生物学的な話なのだなと思って、これこそ、なんかこれが心理学なのだなと思って、別の話になるとアイデンティティの話とかてきて、ああ、こういうこともするんだなっていうふうに感じて、発達心理学はいろいろやるんだなあと思ったのですよ。それで今、二年生で受けている応用心理学概論と実験心理学概論と臨床心理学概論を聞いて、それで、こういう、幅が広いなあと感じました。細かいところを、いろいろ、人間の視野がどうのこうのっていう話を聞いていて、そうだと、そういうことも知りたいなとは思うのですけど、やっぱり、人間の一生を通して、広い範囲を学べるのは魅力的だと思いました。

G：私も大学に入ってどの分野を勉強しようかと思った時に、臨床と発達が最初頭にあったのです。ただ、臨床はいろいろな心理テストがたくさんあって、心理テストは私の中で、確かなものというか、確実性の高いものと思っていたですけれども、いろいろ勉強していくと、そうでもないっていうのがわかつて、心理学って人間を取り扱っているので、必ずしもそう簡単に割り切れるものではなくて、あいまいなところもたくさんあって、当然だと思うのですけれども、臨床だと、あまりにもあいまいなところが多くすぎる気がし、確かなところっていうと、人間の行動を見ていくところと思ったのです。そこで臨床よりは発達の勉強を続けていきたいと思いました。それから、先ほど英語の話もありましたけれど、私も本当に英語が苦手で、シラバスを見た時、全部英語で書いてあり、先生からの要望でも「極端に英語ができる人は、ある程度できるようになってからきてください」と書いてあったので（一同笑い）、妹にも、お姉ちゃん、「これやめといた方がいいよ」と言っていたのですけども、二回くらい受講すれば大丈夫かなって思って、頑張っている最中です。でも実際構えていたよりは、先生がわかりやすく説明して下さるので、予想していたよりは、気持ちを楽にして、授業に出席しております。

H（院生）：私は一年生の時に、日本語の授業を受けていましたのと、後4年生の時に、院試の関係で授業に出させて頂いて、その時に英語の授業も受けていたので、その違いが話せるかなと思っています。やっぱり私も一年生の時、皆さん多くと同じように、臨床にひかれて、将来は「絶対臨床心理士になるぞ」と、平田先生にも相談にしたほどなのですけれども、でもやっぱり、古澤先生の良さもあると思うのですけど、大学一年生の時に、他の、あまり統率のとれていない、そんなにあんまり魅力を感じなかつた授業に対して、すごく発達心理学概論の授業が面白かったなと感じたのは、ひとつはどんどん知識が入ってくる楽しさみたいなのがありました。その一年生の時の発達心理学概論はハンドアウトもなく、提示されるパワーポイントの画面だけで、ひたすら、先生は「後で、資料として配ることもできる」とおっしゃって下さっていたのですけれども、私はひたすら画面に書かれてあることを全部書いて、それプラス、先生が授業中におっしゃったことをメモでとつてくっていうふうにしていたので、書くことで、

憶えるっていうのが面白かったです。特に、愛着っていう言葉にすごくひかれていて、発達心理学となると、また違う意味をおびてくるのがとても面白いなって感じました。なので、一年生の時に日本語で学んだ発達心理学概論は、今、発達心理学を勉強している根底みたいなものがあるかなって思っています。やっぱりそのときは書くことでわかる、書く事によって、自分でノートを作ることによって、理解することができるかなって思いました。なので、先ほどEさんがおっしゃられたハンドアウトのことについても、今は先生が配って下さるハンドアウトがあるので、そこに書き込みをすればいいっていうのがあるのですけども、自分でノートも作ることが必要なのではないかと思いました。それで四年生で受けた時には、そのときはもう勉強会にも参加していましたし、バークも多少は読んでいましたので、英語でも面白いっていうふうに私は感じることができました。それから、先生方がおっしゃっていることもよくわかるし、「あっ、これ前聞いたぞ」とかあったので、そのときは英語でも楽しかったのですが、やっぱり初めて心理学を勉強する一年生にはちょっと難しいのかなとも思ったりはしました。あとは、先ほどDさんも言っていたみたいに、二年生の時に、古澤先生と一年間全く接点がなくて、一言もしゃべらずにゼミを決めたっていうような記憶が強く印象に残っていました。やっぱり、一年生の時に受けた発達心理学概論の感動が二年生の間に薄れてしまうので、今小島先生が始めておられる、基礎実験の中の「行動観察法」が、これからどんな影響を与えていくのかが楽しみでもあります。あとさっきBさんが言っていた、活かす方法みたいなので、どうしても発達心理学を勉強していると、知識による理解が先行してしまうので、もっと現実の生活に確実に関連付けられるようなことがあるといいなと私も感じたりもしました。なんかもっと身近に発達ってあるんだよって今までそこわかるのですけど、やっぱり一年生に入ったばかりの時は、なかなかそういうことはすぐには結びつかないかなっていう風には感じました。

C：二年生で発達心理学の授業がないことをさっきおっしゃられた方がいましたが、正直にいうと、春学期の方は、乳幼児心理学があったのでそれで満たされてた感じがあるのですけど（笑い）、秋学期だと、何も発達心理学の授業がなくて、正直、つまら

ないのでですね。秋学期にも何か発達心理学の授業があったらすごくうれしいなとちょっと思ってしまうのです。あと、発達心理学を活かすってことで、最近とか幼児虐待とか、子どもを育てるってことについて、不安を感じる人も多いと思って、その不安を解消するのに、発達心理学が手助けがやっぱり必要となってくると思うのです。

E（院生）：私も今の話と関係してくるのですけれども、さっきもHさんがおっしゃったように、臨床心理学というと検査とかカウンセリングと非常にわかりやすくて、ある意味、キャッティだからこそ学生が集まりやすいと思うんですけど、発達心理学のいいところって、噛めば噛むほど味が出る学問だなって、私自身本当に思うのですね。私も、研究生の時代に一年勉強させてもらって、本当は発達心理学を理解していなくて、まず、理解することに必死な一年だったのです。で、二年目になってから、そのTAとして立場で授業を聞くようになってから、「あぁそういうえばあのときに習ったなあ。」っていうふうに再度確認できた年で、三年目になってから、今度は同じ話を聞いているんですけど、それを違った角度で見ると、こんなにいろいろなところにつながりがあったのだとわかる年になり、それで四年目になって、やっと自分自身の興味というところと結びつけて発達心理学を引き寄せられるようになりました。このように私自身の中で発達心理学を蓄積するのに、四年かかったので、今思えば、一年生で何もわからないような状態の学生達が、しかも英語で、発達心理学の良さを知るっていうのは相当難しいことだなって思っています。そこで、もしこれが可能であればの話ですけれども、先程の意見もあったように、二年構成にして、一年目は、全体を網羅して、いかに発達心理学が実生活と非常に密着して、あなたたちの見方を変えるということを伝える年にし、二年目にそれこそ本格的に細かい理論を着実に学んで、それが卒業研究に結びついたり、あるいは進学につながる道となるというような二年構成はどうかな。二年で初めて発達心理学概論を合格するという非常に難しいかもしれないんですけど、そう思いました。（一同爆笑）

D：今面白い意見が出たばかりですけども、さっきから英語の話で大変だったっていう意見があって、私も一年生の時に大変だったのですけども、英語に

も全然触れていない、もう基礎の基礎からやり直さないと、ああってなんだったってみたいな感じのレベルだったので、古澤先生の授業についていくのも大変だったとは思うのですけれども、今は大変だったというよりもすごく楽しくって、行かなくちゃいけないじゃなくてモチベーションが高められるような、パワーポイントで英語がつらつらって出されて、私は最初は全然わからなかったので、先生の言葉を聞きながら、ああこれはなんて書いてあるんだろうって、先生の語りで、一生懸命内容を理解しようとしていたので、後から帰ってプリントを読んで、そこから少し英語って面白いとか、今までそんなこと感じたこともなくて、必要性も感じたことがなかったので、英語が不得意な科目でしたのですけれども、今は、院に行きたいとか、今後も英語に携わっていきたいとか思えるようになったのだから、あの授業はやっぱり大切だったのではないかと。すごく大変で、一年生の「うっ」という意見もわかるのですけど、私はあれがあったから、英語を離れずに発達心理学に近づけてきたんだと思うので、私にとってはよかったです、覚悟を決めるっていうか、確実に力をつけておきたいと思えたきっかけになったのが発達心理学概論であったと思っています。あと、発達心理学のいいところは、臨床心理学では臨床心理士になりたいからってしていくところの気がするんですね。発達心理学は本当に興味がある人だけが、興味を持った人だけが集まってるっていうイメージがあって、あと人に優しいとか、いつでもそのひとがやる気になったら成長できるっていうような観点があるのではないかっていうのがあって、誰でもウェルカムみたいな感じの学問ではないようなところが私としては魅力を感じているところがあります。

B：今のDさんのおっしゃることを聞いて、今振り返って、一年生入ってきて、それこそとれるだけとったので、60に限りなく近い単位をとっていて、私はほとんどの授業を受けていたのですけれども、今思い返して、一番思い出に残っているのが発達心理学概論の授業だったのです。高校から大学に来て、統計の授業だったり、教養の授業だったり、諸領域とかいろいろありますけども、どれも私の中で高校の延長だったのですね。教科書があって、教科書を読んで、プリントを読んで、または板書を書きとてという。でなんかわからなかったらあとで先生に質

問して、みたいな。なんかそういう高校の授業を連想させるようなものだったのに対して、ちょっと方式も違いますよね、パワーポイントがあって、みたこともない機械が出てきて、それこそほんとに、音楽までできちゃって、それだけでその日のネタになるような（笑い）。そんな感じでなんか、絵も出てきたりして、受講していると大学生になったっていう意識を感じる教科だったと思いました。

C：私もお二人の意見を聞いていて、思ったのですけど、一年生で最初から英語というのはきついっていうのはあったのですけれども、今考えてみると、一年生だからこそ、まだ英語についていけたような気がするのです。もう二年生になると英語を忘れてしまっていて、やっぱり、大学の英語っていうのはあまり力が入っていないせいで、いい加減に受けてしまうところがあったりして、やっぱり受験で、一生懸命勉強したあとに、一年生の段階だったからこそ、ついていけた気がするのです。だからその、一年生のうちから、発達心理学をそいやって英語で勉強するというのは、意味のあることでも有るような気がしました。

A：私も実は発達心理学概論を一年目に落としたのですけれども、英語ほんとに苦手で、すごく抵抗もあって、行くのも憂鬱なくらいだったのです。でも二年目って思ったのは、一年目落としたのは自分が勉強しなかったせいだと思いました。授業でハンドアウトが配られても、別にそのときに、今すぐ訳す必要はないし、それはあとで楽したいから、先生の話をそこでメモっておいて、わからないところがあれば、家で帰って復習すればよいのに、それを怠って一年たって期末試験を受ける感じですから、そんな何十ページもできるわけがなかったのです。二年目はそれを反省してやっていったのですが、そしたら、別にそんなに難しい文法がたくさんでているわけでもないし、それくらい大学生はやるべきだと思うし、やっぱりそういう緊張感も必要だと思うので、あの、さっきもBさんも言ってましたけれども、板書を書き取るというのはやっぱり高校生のやることだと思うし、家に帰ってからはやることそんなになくて、他は本当に楽でした。あと最初に英語で発達を勉強すると、たぶん英語で単語が入ってくる。先生はよく日本語でしゃべっていても英語が入ってますけれど、なんかそういうのって、大事な

気がして。あとから日本語で覚えるのは簡単だと思うのですけど、日本語で最初覚えたものを英語で覚えようとする、その方が大変な気がします。だから最初に一年のうちから英語で入れちゃって、それをあとで補強するっていう形でもいいのかなって思います。あと、Eさんが二年計画でとおっしゃってたのですけど、それもすごくいいと思いました。Eさん自身が手探りでやっていったように、私たちもやれば、その方がよいのかなって思ったりします。自分でこう学ぼうって、そういう気持ちがあって、初めて何でも身につく気がして。なんか全部準備されてしまうと、自分で準備することがなくなってしまうかなとも思ったりして、本当に発達心理学って奥が深いので、そういう何年も、四年計画でというのもいいと思いました。

I：英語の話がたくさんきてきたのですけれど、私なんか受かって、単位が取れていて、それにびっくりして、だからたぶん、なんとなくは覚えているのですけれど、咀嚼しきれてない部分があって、身についてないだろうなって感じなのですよ。だから単位は取れていても、授業がもう一回受けなおしたいって思うのがあって、もう一回やっても、ちゃんと充実した授業内容だと思うのです。今はっきりいって、なんなくついていくのが精一杯で、なんなく、なんか聞いてなんなく理解していく、細かい部分までは、およその部分で理解していく、アバウトすぎるので、もう一回なんかチャレンジできたら、単位は取れていても、もう一回チャレンジできる授業であってほしいって感じがします。あとさっきの発達心理学を役に立てるっていう話があったのですけど、臨床の場合は自分に異変を感じている部分が多いと思うのですよ。だけど、発達心理学は人生の流れを見ているので、予防策っていうか、予防する面でわかっていたら楽なんじゃないかなって私は思うのですけど。思春期のときとか、なんでこんなに苦しいのだろうとか、思うのですけど、それが思春期だから、そういう葛藤っていうか、アイデンティティを作るための葛藤のために苦しいとか、そういうことをちょっとでも知ってれば、ああ、みんなも苦しいし、これが成長するための普通の過程なのだなって思えたら、思春期のときのあの苦しさが楽になるんじゃないかなって思うので、普通の人にもそういう一般知識として知っていれば、予防策の一つになるのではないかと思うし、あと友人で親戚の人

に離婚して子どもに与える影響はどうなのかって相談された友人がいて、そのために発達心理学を勉強したいって友人がいたのですけど、実際私、勉強していても、まだ納得できてなくて、そういう部分がわかっていても、役に立てるかという疑問があるのですけど、まぁそれは人それぞれなので、そこは自分で対処しなければいけないのかなって、ちょっと感じていて、できれば本当は、離婚した子どもに与える影響がこういうことがあるから、予防策として、こういうふうにした方がいいんじゃないかなっていう考えまで辿りつけたらよいと考えています。

J：私は看護師をやっていて、看護師をサポートするシステムが全然ないなと思ったので、ホスピスなどで働いている看護師は結構燃え尽きちゃって辞めしていくっていうのを聞いて、私自身、最終的にはホスピスで働きたいと思ったときに、その、看護師のフォローっていう面と、あと、ホスピスに入った方の精神的ケアをするのに、心理学を学んでから、ホスピスに勤めたいなど考えて入学しました。実際に入ってみて、こんなに英語まみれになるとは思ってなくて、正直辛くて。私はホスピスに勤めるにあたって、臨床を主に学ぼうっていう気はなくて、まぁ全体を学んでから決めようとは思ったのですけども、発達と応用がメインに学ぶべきことなのかなと思っていました。それで、発達心理学概論のシラバスを見たときに、高校三年生くらいの英語力を求むと書いてあって、私には中学三年生の英語力もないのかなって思って、まず、とりあえず、英語を勉強してから、二年生になってから学ぼうと思って、最初の心理学講読演習が古澤先生で（一同苦笑い）、古澤先生の一回目の授業で、私は卒業できるのだろうかと思うくらい、ちょっと辛い思いをして、なんとか、単位をいただいて、二年生になって、やっぱりちゃんと発達心理学を勉強したいと思って、概論を取りました。一年生の心理学講読演習で、とてもきつい英語だったので（笑い）、発達心理学概論はなんとかなってると思っています。あと、発達心理学概論で一番驚いたのは、生まれてから発達とばっかり思っていたので、遺伝とか胎児期とかからやっていただいて、すごく興味深いと思っています。大学に入って、一番驚いたのは、授業を聞いている側の態度の悪さっていうか。私が学生だったときはちょっとでも後ろ向いてしゃべったりとかしたら、チョークとか黒板消しとかびゅーんって飛んでくるくらい（笑）

い), 先生が厳しかったのに, 大学ってこれくらい, ある意味自由というか, うるさいし, バタバタ出て行くっていうのがなんかものすごくショックだったのです。けれども, 古澤先生は最初にちゃんと「静かにしろ」って言ってくださったし, 20分を越えたら入らせないと, 厳しいというか, ある意味ほつとして, 小島先生もうるさい人は注意してください。授業を受けていて, 他の授業がものすごくうるさくて, ちょっとイライラしている面があったので, 授業自体が受けやすいなっていう印象があります。それで, この先のことなのですけれども, この先ゼミを選ぼうと思ったときに, 発達心理学はとても興味深くて, この先勉強していくみたいと思うのですけれども, じゃあ, この先私自身の仕事にどう活かされていくのだろうっていう答えがまだでなくて, 実際の仕事に活かそうと思ったら, 応用になっちゃうのかなとか, 今すごくそこで悩んでいるところです。

F: 心理学講読演習の話を聞いて思い出したのですけど, 大学生になって, 講読演習や発達心理学概論のテキストとかプリントをもらって, 英語ばっかりでちょっと心配もあったのですけれど, 大学生になったなあとわくわく取り組んだのです。それでまあしばらくやっていくと, 講読演習の, ちょっと先生の悪口になってしまふかもしれないのですけど, 先生があまり説明をしてくれないし, 生徒がざわざわしていて, せんせん聞いてないっていうのもあるし, ざわざわしていて, 先生の声が聞き取れないっていうのもあって, あまりちょっと, あの先生の講読演習はっていう感じだったのです, でも, 発達心理学概論はその英語ばっかりで, だんだんモチベーションが下がってくることもあったのですけれど, 授業は先生が日本語も書いて, ああ, なるほどなるほどって, 楽しかったと思いました。

C: 私も心理学講読の話になるのですけど, その講読の先生が, 私の場合はちょっとあまりよくなくて, ちょっと悪いのですけど, あのう, 結構英語を訳してくるのが苦痛だったのですよね。内容はその先生の分野で結構専門的なので, 内容のほうは仕方ないと思ったのですけど, 進め方があまりで, 苦痛だったので。発達心理学概論の方は訳してて, まだなんか有意義だった気がして, 自分にとってはこれから将来英語の文章を読むにあたって, 和訳をしていくのは, あの講読よりは自分にはるかに意味がある

ことだったなって思います。

B: 私はずっと講読を何かしらとっていて, 私は担当がずっと実験系の先生, 講読IVもとったのですけれど, 実験系の英語の文章を一年の最初にやったのは, 結構大変だった記憶があります。実験内容の単語であったり, 特徴的な和訳を考えなくちゃいけなくなったり, 日本語にしても理解ができないような単語が実験の序論にあって, ○○先生の講読はお腹が痛くなりましたよね, Dさん(笑い)。その点, 発達心理学の文章は, まぁ難しい文法はありますし, 単語も今まで見たこともないようなものもありますけれど, ある程度, 考えることによって, こういうことを言っているのだろうというのが, 自分の経験と照らして, 理解することができたような記憶があります。

古澤: いろいろ大切な意見が出て, 教える側の反省と抱負にもう1セッション必要な感じがしています。まぁ私なりの抱負もあるし, もっと大きな抱負を小島先生が語るという……そこに果たしてEさんの見解がどういうふうに実現するかという……いずれにしてももう1セッション持ちたいです。

私が, 講義は, これでよいのかなって, もう少し展開をする工夫ができるかなって, 常々思いながら, もう5年を費やしてしまったわけです。その辺のところをこれからどう考えていくのか, 身近なことを取り上げても, 発達というコンセプトの中で, 考えてもらうことはたぶんできるだろうと思うので, その辺のところに早く聞き手に気づいてもらうというのは, どうも大人数の講義の枠組だと工夫しにくいように思っているのですが, 講義をする側自身がその気になれば展開できるものと思っているのです。だから, 私の最大の反省点であり, 今もって解決していないのは, 授業という枠組みが, 話し手と聞き手という二つの役割で固定されてしまう, 分断されているというところですね。それから, 今日またまた塚田さんの講義をビデオを撮りながら, 学生の椅子に座り, 受講している様子を見ていて感じたのですが, 大変に忙しく, 授業を聞いているという印象がしました。例えば, スクリーン見て, 辞書引いて, ノートとってという具合にとても甲斐甲斐しくしているのです。そこで, 授業が終わったときに, 「やっぱり大変ですか?」って尋ねたら, 「そうなんです, 全ては家へ帰ってからはじめて, そこで伝わってく

るものがわかるのです。ここではひたすら書いて、後でわからないことがないようするので精一杯なんです」って、言っておられました。このことも講義をする側として考えるべきことを含んでいると私は思いました。

小島；僕もあの、だいぶメモを取りましたけど、KJ法かなんかで分析しようかなって考えています。やっぱり授業をするのは難しいなと思ってね、発達心理学概論、僕もはじめここに赴任したときに、古澤先生の講義、何回か受けさせていただいて、やっぱり僕も衝撃でしたね、英語で講義をされるっていうでね、僕が大学時代にもそういう講義受けたことないし、一体どういうふうに授業は進んでいくのだろうと思って、パワーポイントを使った授業なんて受けたことが僕はなかったものですからね、かなり衝撃でした。で、英語、なんで英語なのだろうって正直最初（笑い）、思いましたけどね、まぁ授業聞いていくうちにね、みなさんがいろいろ意見おっしゃったように、なるほどなあと英語で発達の話を聞くのはやっぱり意味があるのだなあというのかね、古澤先生には思いがあって、英語でやるっていうこだわりがあるのだろうなって、聞いていました。で、乳幼児心理学も英語でやらないといかんかなと（一同笑い）思いましたけども、ちょっとさっきね、いろいろ話を聞いていて、英語を勉強するためのツールとしての発達心理学っていうそこを話した人もいましたし、それから発達心理学を勉強するためのツールとしての英語っていうのかな、そのこう両面が見え隠れしてね、で、僕はその後者、発達を勉強するために英語をツールにするんだっていう必要さ、面白さっていうのをもっとこう学生に伝わるといいかなあっていうのを思いました。で、誰かがおっしゃっていましたけど、わかっていることを知識として教えてもらうってことだけじゃなくて、自分たちが考える、考える授業というのか、そういう授業をするのは非常に難しいなと、今の古澤先生の送り手と受け手という問題にもつながるかもしれないのですけど、まぁどうしても、講義をやるときに、なかなかキャッチボールの形で進めていくっていうのは難しくて、どういうふうに実現していくのかっていうのはこれから講義の中で少し、考えていいかないといけないかと思っています。それから、カリキュラム、概論を二年立てにするっていう結構大胆な意見も出て、まぁみなさんもご存知のようにね、古澤先生、

来年度で退職を迎えて、いま少しね、カリキュラムなんかについても、まぁ、ちょっといくなんていいう、古澤先生におしゃっていただきましたが、僕もちょっと荷が重いなあと思ながら、あの、発達の魅力っていうのを伝えていくにもカリキュラムってすごい大事なんだと最近実感しているのです。えーっ、また他の方の意見を聞きながら、発達の魅力を伝えられるような、僕自身もそうだし、全体の構成のような部分もね、授業の、いろんな授業と授業間のつながりみたいなのも含めて、考えていかなきゃいけないなというのを、みなさんの意見を聞きながら、考えていました。

塙田：いろいろ皆さんのお話を一つ一つ共感しながら聞いていたのですけれども、やっぱり積極的に自分で勉強していくのっていうのが、私は古澤先生にご指導いただいて10年以上経ちましたけど、すごく、古澤先生のそばにいるとそれが自然で、あの、修士終わったときにそれを実感したのですよね、「ああ、わかんないことは自分で勉強するんだ、誰かが教えてくれるまで待ってるのではなくて、やりたいと思ったことは自分でやるし、できなかったら相談するし、わからない言葉はわかるまで自分で勉強するのだ」というのが、しんどいと思うこともあるのですけれど、そういうふうに思ってることが大事だなって。で、発達心理学概論の授業も、あの、確かに、私も資料を見ると、「全部英語だよ」って、今でも思います（笑い）。そういうふうに思うことが、逆に、「じゃあ読んでやろうじゃないか」とか、っていう気持ちを起こさせてくれるなっていうのと、この授業を春から、受けていて、改めて言葉の大さっていうのを思いました。英語で授業を受けることで日本語でわかっている、わかっているって思ってることでも、「本当にわかっていた？」っていうことを問い合わせる機会になると思います。今私は発達心理学概論の授業を、教える側と受講する側の両方を経験していますけど、受講する側から考えると、皆さんの話とも重なるなと思って聞いていました。また、授業する側としては、今日の話をどう抱負にしていったらいいか、わからないのですけど、私は、ドクターの学生のときに、最初に東京女子大での発達の授業を手伝わしていただいたのが初めてで、最初からあのスタイル。日本語でしたけど、パワーポイントで提示して、授業をするようにと、そういうスタイルで授業をするものだというふうに入って、来

て最初はひどかったですよね、最初はもうはちゃめちゃで、もうかなり、なんていうか、人目にさらされるのが怖いっていうくらいに、もう、すごく今の概論みたいに大勢の授業で、一人二つの目がびゅーうって向かってきている気がして、なんでそう思ったのかっていうたら、やっぱりよくわかってなかつたのですよね、しゃべるのに。自分がアタッチメントの説明をするのに、今までこう読んでいて、「ああ、アタッチメントね」みたいに思っていたけれど、いざしゃべって、わかるように伝えようとすると、全然わかってない自分がいて、それがものすごい衝撃で。そのとき古澤先生に、「子どもの目から見たら、世の中がどんな風に見えるかをお話してあげるのだよ」というふうに言ってもらって、「ああ、そうか、お話してあげるのだ」というのを今でも心がけているのです。あとやっぱり、他大学で非常勤をやっていたときに、まぁみんなに、感想を書いてもらうと、さっきの授業の受ける側と聞く側っていうのはなしにすごく関連していて、「先生、全然私たちの気持ちを聞いてくれない」と感想に書いてあったことがあったのですよ、それも150人くらいのクラスで。じゃあ一体、どうやって聞けばいいのだって。授業を伝えることしか頭になかったと思うのですけど、もっと私たちの気持ちを聞いてもらいたいっていう感想が、結構あって、そういうことが、授業っていうのは大事なのかなと、やっぱりすごい実感します。だからどうしたらいいっていうのは、今の私にはわかんないですけど、まぁ、そんなところでです。

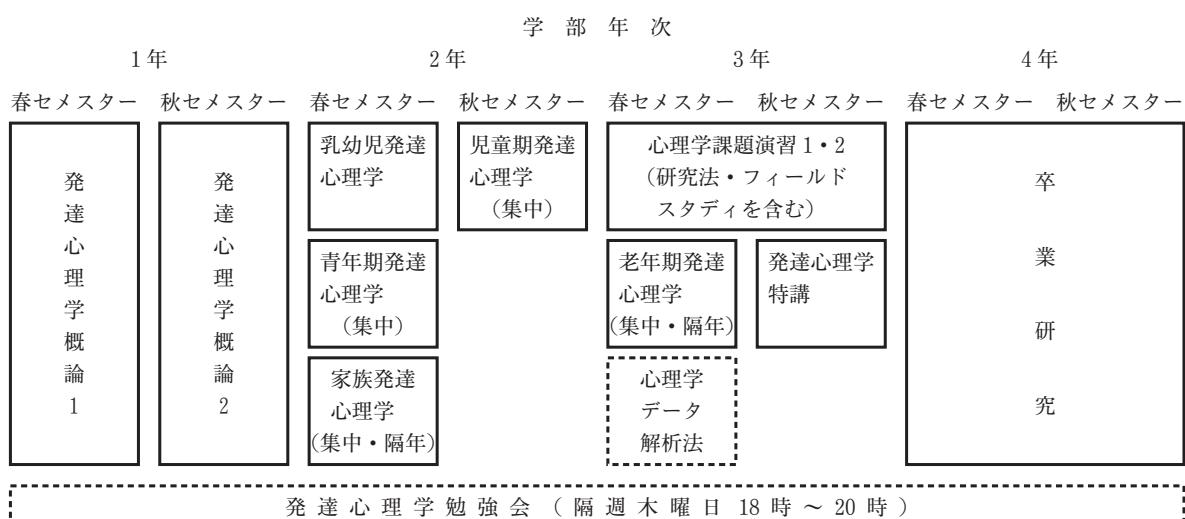
学部における「発達心理学」教育の課題

1. カリキュラムをどう組立てるか

下の図は、発達心理学領域カリキュラム構成を示したものである。開講学年としては、「発達心理学概論1・2」については、1年次、「乳幼児発達心理学・児童期発達心理学・青年期発達心理学・家族発達心理学」については、2年次、「老年期発達心理学・発達心理学特講」については、3年次に配当している。その配置及び順序については、このような名称で授業内容を分類していく考えに沿えば適切であると考えられるものの、それぞれの講義相互の構成内容についてはこれまで検討がなされていないのが実情である。このことは、担当者間の情報交換の不足は勿論のこと、受講生側が同様な内容を受講するのに慢性化していることも一因と判断できる。もちろん、同一の内容であってもその位置づけ、説明の視点などに講義者独自のものが含まれているので、同様な内容は一概に避けるべきであるのではなくて、いかに有機的な連携を図って行くかにあると考えられる。

今後は、専任教員・非常勤講師担当科目を通して、講義間のつながりと内容的整合性を意識した検討が一段と必要であろう。そして、本来ならば、このような検討は学部として取り組むべきものであるかもしれない。その必要性は、本来初学者にまず提供すべき概論が「発達心理学概論」以外すべて2年次配当になっている現状にも端的に現れている。

学部発達心理学領域カリキュラム構成系統図



2. 受講生が主体の授業をどう実現するか

発達心理学を学ぶ最大の魅力は、第2著者(YKj)の言によれば、次の通りである。

「いままさに生きている生身の人間にかかわる具体性、それを通して、皆が自分のこれまでの人生やルーツ、そしてこれから的人生を、長い時間のスパンで考える視点を身につけることにある。教科書通りのことではなく、生身の人間の姿が明瞭にイメージでき、かつそれが自分自身の生きかた・ありかたに引き寄せて考えられるところにある。さらに、そのことを通して、人間の生き様が画一的なものでは決してなく、多様性、個別性の高いものであることから、ひとりひとりの他者を尊重する心がいかに必要であるかを改めて認識するところにある。」

講義者側から考えた場合に、このような見方をいかにして受講生に覚知してもらえるような授業が実現できるかが問題となる。その場合、最も留意すべきことは講義が一方通行に終始しないということであろう。この点は、これまでの授業における最大の反省点である。それは受講生が参加する授業をいかに展開できるかにつきる。受講生が自分たちで考え合う機会を授業の中でいかに実現できるかである。幸いなことに、発達心理学概論では、2006年度においては、400名収容できる教室で140人程度が見込まれる授業を行うことが出来る見通しがたっている。教室内での小テーマをめぐるグループ別討議などを交えながら、少しでも受講生たちが能動的に自分で考えられる授業を目指したい。

3. 受講生が自分の将来を考えることへ寄与できるか

受講生の発言の中に発達心理学を学ぶことを自分の将来にどう繋げられるかという疑問が、特に大学院への進学を考えている4年生からいくつか出されていた。そこには、大学で学んだことを実社会で活かしていこうとする意欲が感じられるものの、考え方によっては、近接領域においては、大学院修士課程を修了し、認定試験に合格すればひとつの資格(臨床心理士)が得られるのに、発達心理学領域ではそのようなシステムがないことによるあせりとも判断できる。実は、この領域でも大学院修士課程において、学会認定資格である「臨床発達心理士」が取得しやすいようなカリキュラム構成を考えたことがあったが、その方向を考えるよりも家庭裁判所調査官、法務鑑別所職員、児童相談所などの心理職員、教員、保育士、介護士など発達心理学によるものの

見方、考え方を基盤として仕事ができる専門職を選ぶことを薦めているのが現状である。

発達心理学を学ぶことが本人の将来にどう結びつくか、それは発達心理学の魅力から引き出される“着眼点の新鮮さ”“ものを考えることの楽しさ”を体得することによって発想されるものであることを期待したい。

4. 提示教材が英文であること

受講生からの発言では、発達心理学概論で教材が英文であることに触れたものがとても多くみられた。英文ということで受講生が抵抗を感じることや、敬遠してしまうことは不甲斐ないことであるが、それが現実である。予習や復習をしっかりとやっている受講生に限っては、発達心理学を英文で学ぶことの大切さを理解できているであろうし、それを通じて、英語力を向上させることにもつながるであろう。けれども、内容理解にまで踏み込めずに、直訳ならばまだしも一つ一つの単語を辞書を使って日本語にするのに終始している学生が多く、そのことが内容の面白さにまで踏み込んでいけないとの障壁となっている(このことはわが国の高校までの英語教育が英文を英文で理解するということは一切なされず(最近こそはその試みも少しずつ取り入れるようになってきてはいるが)、必ず日本文に訳してはじめて理解するということしか行われていないからである)。

今後の方策は二つある。その一つはこれまでの方法を基本的に踏襲し、副教材までも英文を用いて、あくまでもそれに食いついてきた受講生のみを対象として授業を行うことである。そして、もうひとつは、まずはあるテーマについて、内容をしっかりと日本語で説明し、それを理解させたうえで、それが英文ではどのように表現されているかを学ぶという進め方である。単語や内容の理解において、「事前の知識」が助けとなるだろうし、そのことがやがて、英文で発達心理学を勉強してみようとする動機づけにつながるのではないかだろうか。

とにかく、英文に触ることは、いろいろな意味でとても大切なことでありながら、大学においてそういう機会が圧倒的に少ないことも事実である。今後も、工夫を重ねて、より良い方向を目指したい。

付記：この報告は、平成14年度中京大学特定研究「新しい心理学教育の創造（継続）：その問題と改善」

（研究代表者：古澤賴雄）に対する助成を受けて、
開始され、今日に至っているものである。

注

- (1) 国立大学では、10～15名、私立大学では、60～80名であった。
- (2) 2001年度については、本紀要第2号に掲載した「発達心理学をいかに教えるか—2000-2001年度学部固有科目「発達心理学概論」講義を通して—」を参照されたい。
- (3) 2002年度及び2003年度授業内容の説明は、本紀要第3巻第2号に掲載したものと同文である。

参考文献

- Berger, K. 2005 *The Developing Person Through the Life Span*. 6th edition. Worth Publishers.
- Berk, L. 2001 *Development through the Lifespan* 2nd edition Allyn and Bacon.
- Berk, L. 2004 *Development through the Lifespan* 3rd edition Allyn and Bacon.
- Blair-Broeker, C., Ernest, R. and Myers, D. 2003 *Thinking About Psychology: The Science of Mind and Behavior*. Worth Publishers.
- Dixon, R. and Lerner, R. 1999 History and systems in developmental psychology. In Bornstein, M. and Lamb, M. (Eds.) *Developmental Psychology: An Advanced Textbook*. Lawrence Erlbaum Associates, 8-45.
- 柏木恵子・古澤賴雄・宮下孝広 2005 新版 発達心理学への招待 ミネルヴァ書房
- 三木義彦・瀧上凱令・橘 英弥・南 徹弘編 2002 新版 心理の仕事 朱鷺書房
- 守屋慶子 2000 知識から理解へ 新曜社
- Slee, P. and Shute, R. 2003 *Child Development: Thinking About Theories*. Oxford University Press.
- Valsiner, J. 1998 The development of the concept of development: Historical and epistemological perspectives. (In.) Damon, W. and Lerner, R. (Eds.) *Handbook of Child Psychology. Vol. 1 Theoretical Model of Human Development*. John Wiley & Sons. 189-232.
- Valsiner, J. (Ed.) 2003 *Handbook of Developmental Psychology*. Sage Publications.

（受理年月日 2006年2月9日）